

保育における児童文化財

—昭和初期の“かるた”を中心に—

池田邦子

はじめに

2017（平成29）年に『幼稚園教育要領』（文部科学省）が改定された。今回の改定では、「幼稚園教育において育みたい資質・能力」及び「**「**」として明示されたことだ。そして「幼稚園」「保育園」「認定こども園」は、「幼児教育施設」として位置づけられるようになった。子ども同士が遊びや生活の中から自発的に、資質や能力を育てることや、様々な体験を通じて、「生きる力」の基礎を培っていくことが、幼児教育において重要なことであると示している。

本研究では、保育のねらい及び内容に基づく活動全体を通した具体的な姿「協同性」、「道徳性・規範意識の芽生え」、「思考力の芽生え」、「言葉による伝え合い」に着目する。特に、この中の一つから取り上げたいのが「言葉による伝え合い」である。幼児自身が活動を通して、主体的に取り組み、共に考えたりする体験が言語活動として育成に繋がると考える。その活動として、児童文化財の中から“かるた”について探ってみたい。本研究は、そうした昭和初期における『幼児の教育』誌の掲載記事を手がかりとしながら、「保育教材」としての“かるた”の意義を検討するものである。

1. “かるた（歌留多）”

“かるた（歌留多）”とは、読み札にあわせた絵札を取って、枚数を競う遊び（玩具）を意味するものである（花札を含めて“かるた”と呼ぶ場合も見られる¹⁾）。その語源は、ポルトガル語の‘carta’（手紙あるいは紙板状のものなど）に由来し、元々は天正時代に伝来したトランプなどのカードゲーム一般を指すものであった。しかし、同様の遊戯は日本とポルトガルとの接触前からあったものと考えられ、もともとの起源は、平安時代の貴族の遊び、すなわち二枚貝の貝殻を合わせる「貝覆い（貝合せ）」にまで遡ることができるという。これとヨーロッパ由来のカードゲームが融合し、百人一首に加えて、元禄時代頃には“いろはかるた”も作られはじめ、今日のような遊び方が主流になったとされる。

“かるた”遊びは、保育現場で広く取り込まれる実践の1つである。その「保育教材」としての歴史は意外に古く、とりわけ「玩具教育」論が開いた1920年代から1930年代にかけては、各地の幼稚園における実践報告、フレーベル館による販売など、注目すべき動向が見られた。古くから遊ばれてきた“かるた”は、牛島義友によれば、「注意、再認、選択、反応、自制心、競争心の総合

遊戯』であるとされる²⁾。それは、言葉に対する認識や思考力を高めること、ことわざの教訓などが遊びの中に含まれており、ただ単に楽しむためだけのカードゲームではなく、「玩具（遊具）」の形を取った「教具」としてとらえることも可能である点で、今日的にも、「保育教材」の観点から注目に値するものと考えられる。

また、『幼児の教育』誌の掲載記事を取り上げるのは、同誌が、1901（明治34）年に『婦人と子ども』として創刊され、以後『幼児教育』（1919（大正8）年1月～1923（大正12）年6月）を経て『幼児の教育』（1923（大正12）年7月～）と改題されて現在に至る「幼児教育の研究誌」であり、併せて児童文化関係への関心も非常に高かったという点を踏まえてのことである。なお、そのように改題をされてきた雑誌であるが、便宜上、総称として使う場合については、復刻版の名称や通例に従い、『幼児の教育』と呼ぶことにする。

2. 昭和初期における“かるた”の保育実践

（1）昭和初期の児童文化と保育

昭和初期は、労働運動や農民運動などが相次ぎ、まさに「冬の時代」ともいうべき時期であった。そのため、児童文化についても、プロレタリア児童文学の登場や漫画・街頭紙芝居の出現という形で、大正期の芸術的な運動とは質的に異なり、大衆的文化的な傾向が見られた。大正末期から飛躍的に人気を得てきた雑誌『少年倶楽部』（1914（大正3）年12月創刊）では、吉川英治や大佛次郎、佐藤紅緑、高垣暉、佐々木邦、池田宣政（南洋一郎）らの小説、田河水泡「のらくろ」や島田敬三「冒険ダン吉」などの漫画が連載されている。また、『赤い鳥』の綴方や詩に触発されながらも、そこにある都会的・童心主義的な側面を批判する教師らによって、生活綴方の運動も取り組まれた。さらに、ラジオ放送の開始（1925（大正14）年3月）は、「ラジオ体操」（1928（昭和3）年11月放送開始）などの番組を通して、子どもの生活を変えるものとなった。

昭和初期になると、セルロイドやゴム、金属の加工技術の発達によって黄金時代を迎えている。昭和恐慌の中で輸出の柱とされたのが玩具であり、それは玩具企業が発展する礎を築くものとなった。しかし、戦時色が強くなるにつれて、素材の調達も困難になり、玩具文化は衰えを見せはじめた。そのような時代ではあったが、「玩具教育」論は、倉橋惣三や霜田静志、牛島義友らによって展開された。

そうした昭和初期の保育については、「幼稚園令」（1926（大正15）年）などの公布により、保育内容が「遊戯、唱歌、観察、談話、手技等」という形に改められ、新たに「観察」が加わって「保育五項目」で構成されることとなっていた。また、「等」と付されたことから、それ以外の様々な保育内容も取り込まれるようになっている。

昭和初期には、日常的な保育のあり方として、大正時代から広まりはじめた園外保育や「自由遊び」に基づく保育方法も定着していた。特に幼児文化との関わりでは、大正期に花開いたものが発展する形で、「口演童話」の通常化、自由画とその展覧、リズムを取り入れた歌・遊戯・全身運動

の奨励など、保育内容の改善が行われている。また、ラジオやレコードといったメディアの摂取・浸透、ラジオ体操の普及、小動物の飼育や園芸の広がり、「兵隊ごっこ」を含む模倣遊戯（ごっこ遊び）の盛行、ピアノ・オルガンの常備化、いわゆる“お遊戯”形態の伝播、『コドモノクニ』（1922（大正11）年1月創刊）や『キンダーブック』（1927（昭和2）年月11月創刊）などの幼児向け絵雑誌の普及、人形芝居・紙芝居の製作・実演という、新しい特徴も見られた。さらに、保育の計画については、東京女子高等師範学校附属幼稚園による「系統的保育案」（1935（昭和10）年）の作成があり、体系的な保育案づくりもはじまっている。

（2）「コドモカルタ」（1929年）

1929（昭和4）年12月、『幼児の教育』誌（第29巻第12号）は、東京女子高等師範学校附属幼稚園の報告記事「子供のつくったコドモカルタ」を掲載した。この記事は、同園が制作してフレーベル館から定価35銭で発売された「コドモカルタ」に関する記事である³⁾。これは紹介文と全48枚からなる「読み札」のリストで構成されており、前者の全文については、次のようになっている⁴⁾。

一、幼稚園に於て幼児達がカルタ遊をしてゐる間に幼児達のつくったカルタから子供らしいよいものを選定したものであります。そして幼児達のつくったカルタの文句に合せて幼児達がかいた画の中からよささうなものを選定したものであります。従つて従来のカルタと異り真に幼児の合作によるコドモカルタであります。

二、このカルタは今までのイロハカルタのやうに俗悪な文句もなく難解な言葉もなく純真な子供の心、子供の表現その儘でありますからいはゞコドモの標準カルタであり満天下の子供達が喜び共鳴するカルタであります。また教育的立場から見てもこれ位理想的なカルタはないと信じます。幼稚園でも家庭でも是非このコドモカルタを御使用になることを推賞いたします。

また、「読み札」の選定は、同号裏表紙の広告によれば、倉橋惣三と堀七蔵が行ったとある（図4）⁵⁾。そのリストについては、資料2の通りである。

ところで、「コドモカルタ」に対しては、東京女子高等師範学校附属小学校の奥田兵治が、1930（昭和5）年3月、『幼児の教育』誌（第30巻第3号）に評論「面白いコドモカルタ」を寄せていた。そこでは、次のように評価されている。

〔資料1〕東京女子高等師範学校附属幼稚園「コドモカルタ」(1929年)

- (1) いもがころがる
- (2) ろばが逃げる
- (3) はちが刺す
- (4) にんじん食べる兎さん
- (5) ほしいお菓子がなくなった
- (6) へびは長いな
- (7) トンネルは暗い
- (8) 地下鉄道はトンネルばかり
- (9) りんごは赤い
- (10) ぬり絵は面白い
- (11) ルビーが光る
- (12) をとこの遊びは汽車ごっこ
- (13) わくのぼりはおもしろい
- (14) からいからいとほがらし
- (15) よろひを着たい
- (16) 太鼓がどんだんなる
- (17) レコードが歌ひ出した
- (18) そ一つとかくれるかくれんぼ
- (19) ツェツペリンは大きい
- (20) 猫がねずみを捕る
- (21) なんきん玉はきれいだな
- (22) らくだの上のたんこぶ
- (23) 虫をとらうとしたら又はねた
- (24) うまが走る
- (25) ゐなかでお芋掘り
- (26) 野原は広い
- (27) オルガンが鳴つてゐる
- (28) 串にささった団子
- (29) 屋根の上の雀
- (30) まりがつきたいな
- (31) ケーブルカーが山に登る
- (32) ふくれた風船
- (33) コーヒー飲むと温い

- (34) 煙突からけむり
- (35) てんとう虫がとぶ
- (36) あさひが出る
- (37) 猿はひつかく
- (38) きりんの頸は長い
- (39) 雪の日の雪だるま
- (40) めだまの大きいキューピーさん
- (41) ミンミンせみが鳴く
- (42) 椎の実が落ちてきた
- (43) 絵さがしはなかなか見つからない
- (44) 火が燃えてゐる
- (45) 森にけだもの
- (46) せきせいインコがなくてゐる
- (47) 鈴が鳴る
- (48) 京都のまちはにぎやかだ

出典：東京女子高等師範学校附属幼稚園「子供のつくったコドモカルタ」（『幼児の教育』日本幼稚園協会、第29巻第12号、1929年12月、pp.20-21、通し番号は引用者による）。

「その言葉の純真さ。力強さ。ひびきの美しさ。その意味の無邪気さ、端的率直で潑刺なこと。大胆、繊細、生々とした活躍振り。形の面白さ、色彩の純美。凡てに純真な子供らしさが溢れてゐるではありませんか。よくもまあ、この子供達が斯くも立派なものを生んだかと驚歎させられてしまひました。」⁶⁾

具体的には、どのような点から「立派なもの」であるにとらえられるのか。奥田は、“かるた”の「読み札」の文句をすべて掲げ、そこに取り上げられている内容を踏まえて、次のように述べている。

「薄桃色に美しく縁を飾られた四十七枚の文と、藍色に、はつきりと縁を塗られた四十七枚の絵と、両方を夫々対照して、文句を読み、絵を眺めて見るに、そのいずれもが、如何にも子供らしさに満ちてゐて、しかもそれぞれに独特な味を見せてゐる。内容の複雑なもの、簡単なもの、大きいもの〔、〕小さいもの、あらゆる方面からいろいろなものが集められておもしろい。自然界の現象あり、人事界の事象あり、動物あり、植物あり、人がゐる、器具がある。子供達の驚きあり、喜びあり、願望がある、感歎がある。」⁷⁾

「読み札」の文句は、奥田兵治も指摘するように、「材料について見るに、子供達の生活に極めて切実な関係あるばかり」のものとなっている⁸⁾。それは、奥田によれば、「自然の状景」と「動物」、「植物」、「文明の利器（科学の力）」、「玩具、器具、^(ママ)（人工の妙）」、「遊び」、「飲食物」の7つに分類ができるという⁹⁾。彼は、そうした“かるた”の中身について、次のように特徴をとらえて

いる。

「殊に、生活環境に関係あるものが最も多いのは争はれない事実としてうなづかれる。即ち、都会に於ける文明の諸機関、動物、植物其の他の自然物象。子供の生活の直接対照物である玩具、器具〔、〕もつと直接的に生活する飲食物などから採つた材料の多いことも、至極当然のことであらねばならぬ、是等の物象が旺盛な子供達の求知心、好奇心を満足させ、視覚、聴覚、味覚の好感にして微妙なるはたらき等によつて、驚異となり、感歎となり、説明となり欲求となり、願望となつて力強く表はれてゐるのである。絵にも。文にも。』¹⁰⁾

また、その「文」は、「^(ママ)事実を卒直に正しく容認」して、「それを端的な説明として表はす」ものが目立ち、「此の種のもものが最も数多く見られる」としており、「之等をなほ詳細に心して見るときは、表現の不足からその意味が表面にまで表はれないが、単なる説明ではなく、感歎あり、驚異あり、満足があることが窺われる」という¹¹⁾。そこには、「感嘆驚異賞賛するもの」とともに、「願望、希求を遠慮なく表はすもの」が見られる点も特色とされる¹²⁾。

そうした「読み札」について、奥田は、「子供ながらに、その自然観照の鋭いことに驚かされた」し、「端的によくその真意真情を表はし盡くす力強さは見上げたものである」と感想を寄せている¹³⁾。そして、彼は、「自然に何のこだはりもなく斯くも口ずさむ子供達には詩人も筆を捨て、歌人も口をつぐむだらう」として、次のような魅力も指摘する¹⁴⁾。

幼 児 の 教 育 第 九 十 二 卷 第 十 二 号

會橋三先生選
堀七藏先生選

子供のつくつた
コドモカルタ

定價金三十五錢

東京女子高等師範學校附屬幼稚園の幼児達が作つたイロハカルタから子供らしいよいものを選定し、その文句に合わせて幼児のかいた書を組合せたもので、子供の標準カルタであります。幼稚園でも家庭でも是非御使用あらんことをお勧めいたします。

大助市米山先生案
大阪市保育會推賞

◎**桃太郎カルタ** 定價三十錢

「屁をひつて尻つばめ」「カツタイノカサウラミ」
といふ様な「カルタ」を神さながらの子供にどうして與へられませう。本「カルタ」は子供の生活にびつたりと合つた教育的のものであります。

東京、神田、教育會館内
株式會社 **フレール** 館

電話九段 代表三八二七
三三三三
三六三三
八七七五

振替口座東京一九六四〇

図1 東京女子高等師範学校附属幼稚園「コドモカルタ」(1929年) 他の広告

「自然に詩となり、歌となつてゐる。調子、口調のよいこと。韻律のおもしろさ。数回繰り返して読んでみたら。いつのまにか歌つてしまひます。」¹⁵⁾

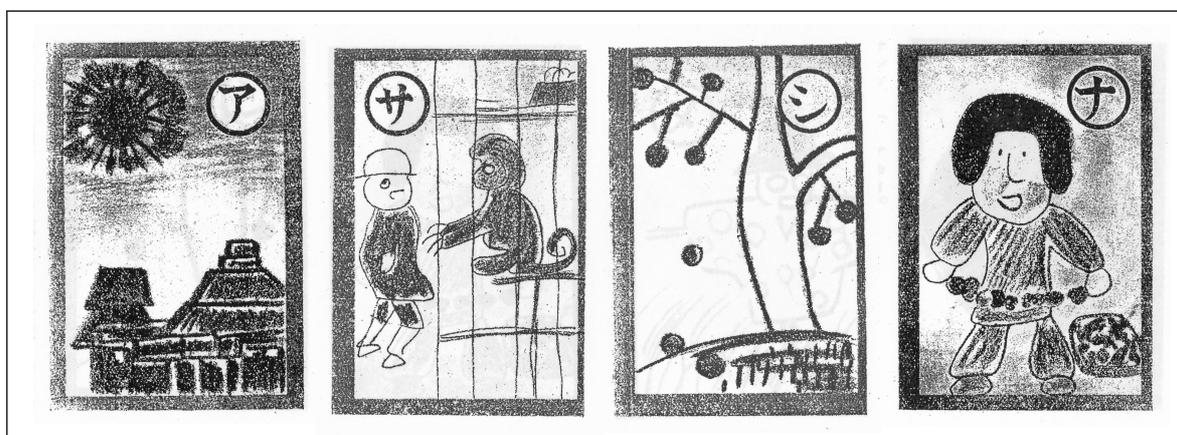
そのような「口調の美しさ」や「子供らしい調子がよい」ところに加えて、「其の他いろいろあるが、終止の音が『ル』であるものが非常に多く、その次に『イ』で終るものが多いことも文法上興味あることである」し、「こんなこともおもしろい研究の資料になる」と述べている¹⁶⁾。ちなみに、「読み札」の文句がすべて「る」で終わる面白い“かるた”と言え、五味太郎の絵本『さる・るるる』(絵本館、1979年)をもとに自ら制作した『さる・るるる・かるた』(同前、1986年)が想起される。

いずれにしろ、この「コドモカルタ」の魅力とは、子ども自身による発句を生かして「読み札」ができあがった点であることは間違いあるまい。そして、そうした魅力は、葛原しげるが報告記事で記しているように、「幼児唱歌」の素材に取り上げられていくことともなる¹⁷⁾。

一方、「絵札」について、奥田兵治は、どのように評価しているのだろうか。彼は、それに関して、次のように述べている。

「……描かれた絵について調べて、絵そのものから来る感じ、絵そのものの持つ味、絵によつて表はした子供達の意図や想像を汲み取ると、なかなかおもしろく、教育上参考になる数々のものを見出すことが出来る。更に文と絵とを対照して考察するになかなかおもしろい。純美な、天真な子供の世界を楽しみつゝ自分がいつのまにか子供の昔にかへつてしまふやうな気持ちになつてしまふのであります。／況んや彼等のお仲間入りをして『コドモ カルタ』を遊ぶときは、複雑な大人の世界に齷齪して焦燥と不安と不満と偽善とに困憊せしめられ、現実の切迫した不自由な窮屈さから解放され、洗ひ清められることであらう。」¹⁸⁾

このように、奥田が絶賛した「絵札」に関しては、彼の評論に写真が10枚掲げられており、それらは図5の通りである。そこに示されている「絵札」を見る限り、東京女子高等師範学校附属幼稚園「コドモカルタ」が、子どもの積極的な参加によって制作された魅力的な作品であることは十分うかがい知れよう。



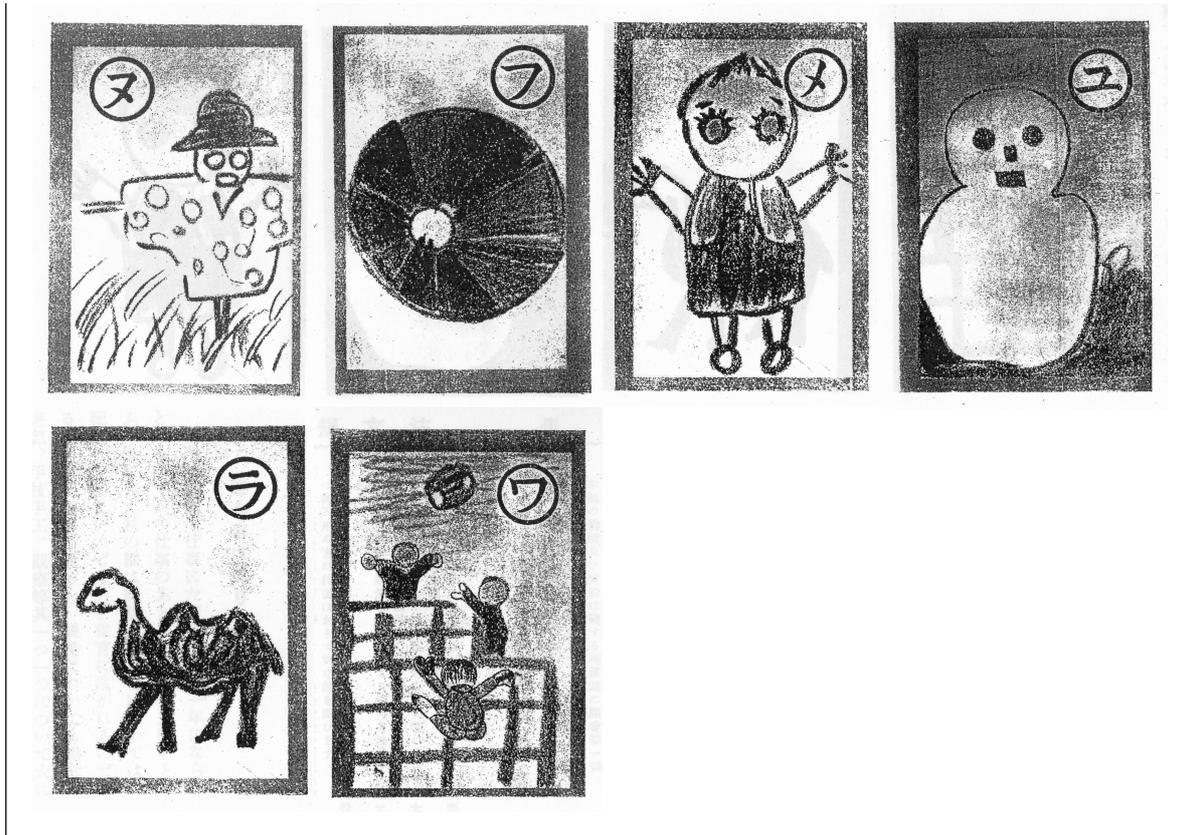


図2 東京女子師範学校附属幼稚園「コドモカルタ」(1929年)の「絵札」

(3) 昭和中期頃のかるた



図3 「サザエさんかるた」(1949年)



図4 「もうすぐ一年生」(1955年)

「サザエさんかるた」は姉妹社から1949年頃発売された。1枚目の読み札は「いまないた ワカメが もうおねだり」。復刻版はその後2012年に発売された。

『サザエさん』は、長谷川町子による日本の漫画である。また、その主人公である「フグ田サザエ」の呼び名である。連載は1974年で終了したが、1976年から1978年まで長谷川による『サザエさんえほん』が9冊刊行された。1980年前後にケイブンシャが発行していた「全アニメ大百科」(年

度ごとに改訂版あり)では、日本で制作された。現在でもテレビ放映されている。昭和・平成・令和と家族全員で楽しめる漫画で、年代を超えて子どもから人気がある。

「もうすぐ一年生」は株式会社 小出信宏社から1955年頃に発売された。

幼児が小学校に上がる前、生活指導のてびきさやわが家のしつけ、学校とはどのような所であるかを知るたにしたものである。作成したのは、東京教育大学附属小学校教諭・樋口方次と長谷喜久一である。

おわりに

「保育教材」としての“かるた”

昭和初期における『幼児の教育』誌の掲載記事を手がかりとしながら、“かるた”に関する保育実践を追ってみた。最後に、それらが持つ歴史的特質を仮説的に整理し、「保育教材」としての“かるた”の意義を検討したい。

第1は、“かるた”遊びを通して、言語能力の向上を図ることに目が向けられていった点である。子どもの文字に対する興味・関心を踏まえて“かるた”遊びが導入され、その興味・関心がより深まり、識字能力も高まったことが報告されていた。それは、幼児の言葉に対する指導のあり方へ踏み込む取り組みであったと見ることができる。そこには、単なる「お正月の遊び」に終わらせることなく、言葉の指導にもつながる「保育教材」として“かるた”を活用し、幼児の言語認識を育てていく方向性が示唆されていると言ってよい。

第2は、“かるた”遊びを発展させ、「談話」のみならず結合を積極的に図っていた点である。“かるた”を交えながら総合的な保育活動が取り組み、そうした実践を通して見た時、“かるた”は単なる「玩具」という枠を超え、総合的な「保育教材」になり得る可能性を持つものとしてとらえ直されねばならないであろう。

第3は、新たに保育項目へと加えられた「観察」や自由画の影響を受けはじめていた「手技」などを踏まえ、身のまわりの出来事や事物との関わりを生かしながら、子ども自身に「読み札」の言葉や「取り札」の絵を作成させる取り組みがなされていたという点である。昭和初期の東京女子高等師範学校附属幼稚園「コドモカルタ」は、「子供がつくつた～」という商品名も示しているように、子どもの言葉を「読み札」に用い、その「絵札」も園児に描かせたところに大きな特色が見られた。子どもにまわりの環境をしっかりととらえさせ、それを言葉や絵で表現させる指導がなされていたことであろう。子ども自身が創作し、それを自ら使って遊ぶ楽しさは、既製品の使用で味わうことができるものではない。そのような創造的な喜びを手軽に感じることができるという意味で、「保育教材」の1つとして、“かるた”は極めて重要な位置を占めるものと見なされてよいであろう。

最後に昭和中期頃のかるたについては、調査の時間的な制約もあって、管見による限り『幼児の教育』誌の掲載記事で確認することができなかった。その検討については、他期における状況の調

査などと併せて、他日を期すこととしたい。

※本研究は、幼児教育史学会第3回大会2007年12月、於・聖徳大学における同類研究の口頭発表用レジュメを加筆・修正したものである。

引用・参考文献

- 1) “かるた”の歴史については、宮本貴美子・木村浩司・大牟田市立三池カルタ記念館『カルタ』（文溪堂、2006年）などが詳しい。
- 2) 牛島義友『愛育の玩具』協同公社出版部、1943年、口絵写真。
- 3) 渡邊編『フレーベル館七十年史』（前掲、p.99）。
- 4) 東京女子高等師範学校附属幼稚園「子供のつくったコドモカルタ」（『幼児の教育』日本幼稚園協会、第29巻第12号、1929年12月、p.20）。
- 5) 『幼児の教育』第29巻第12号、裏表紙。
- 6) 奥田兵治「面白いコドモカルタ」（『幼児の教育』第30巻第3巻、1930年3月、p.50）。
- 7) 同上、pp.52-53（〔…〕は引用者、以下同様）。
- 8) 同上、p.53。
- 9) 同上。
- 10) 同上、p.54。
- 11) 同上、p.55。
- 12) 同上。
- 13) 同上、p.56。
- 14) 同上、p.57。
- 15) 同上。
- 16) 同上、pp.58-59。
- 17) 葛原しげる「コドモカルタから幼児唱歌（1）」（『幼児の教育』第32巻第4号、1932年4月）、同「コドモカルタから幼児唱歌（2）」（同前、第32巻第5号、1932年5月）。
- 18) 同上、pp.59-60。